特集 はこまち対談

Part 19

地域とともに、防災を。

内城 明良（ないじょう あきよし）さん
函館市立西中学校　校長

〈PROFILE〉

1954年4月　大野町（現北斗市）生まれ
1977年3月　北海道教育大学函館分校卒業後
尻岸内町立尻岸内中学校（現函館市立恵山中学校）に赴任
以後　３６年間　函館市内中学校に勤務
2011年4月から現任校に勤務する。

【趣味】　米づくり　野菜づくり

西中学校　校長室にて

今回は、中学校と地域のつながりを強めることで、災害に強い地域づくり活動をしている函館市立西中学校の内城校長先生にお話をおききしました。

丸藤：　昨年からの取り組みになりますね。

内城：　東日本大震災の２０日後に、西中学校の校長として赴任してきました。校舎から海が見えるんです。大きな津波が来た時、どうしたら子どもたちの命を守れるかを真剣に考えました。漠然と、今までのような避難訓練では守れないなと感じていた時、釜石の奇跡を取り上げた番組を観て、感動したというか鳥肌がたったんです。これだなと思いました。

丸藤：　大切なことが分かった。

内城：　一つは、想定にとらわれた訓練はだめだということ。二つ目は、学校だけでなく、地域の協力がなければ絶対に子どもたちの命は守れないこと。三つ目は、“フダンの訓練”これは、一般的なという意味での訓練と断ち切ることのない“不断”、続ける訓練ということです。

丸藤：　まず始めたことは？

内城：　先生方、全てのご家庭の保護者に釜石の取り組み、なぜ子どもたちが助かったのかを印刷して配りました。地域にも配り、九つの町会長さんにも、連携して避難訓練をしたいと言って意識改革をしてきました。

丸藤：　そこで実施したのが、船見公園への避難訓練ですね。

内城：　津波の時はできるだけ早く高いところに、が原則です。船見公園はまちの様子が見渡せ、水や電気やトイレの設備もあり、避難するには最適だと思いました。警察にも全面協力していただき、助かりました。

丸藤：　合言葉もつくりましたね。

内城：　「自分の命は、自分で守る」「助けられるより、助ける人になろう」のふたつです。

　自分の命を守りながら、要支援の人としっかり寄り添いながら避難しようということです。お年寄りの方の車イスを動かしてあげるなどの体験もさせたかったので、地域の方にも参加していただきました。保育園の園児も参加しています。

丸藤：　検証する会もしっかり行いましたね。

内城：　地域の防災意識を高めるには、

地域の人たちが仲良くならなければならないことが分かりました。子どもたちからは、支援を必要とする人がどこにいるのか分からないと言う意見も出ました。

丸藤：　釜石にも行かれたんですよね。

内城：　色んな問題提起がありました。次に少しでも解決するために、どうしても釜石の実態を視てみたいと思ったんです。年明けの１月、釜石に足を運び釜石東中学の子どもたちがどうして避難できたのかを、校長先生と会ってお聞きすることができ、地域の中で、学校が中核になって取り組むことを学びました。被災地から学ぶことは、とても大切なことだと思います。

丸藤：　さらに、災害図上訓練へとつながっていくことになりました。

内城：　西中を会場にして、住民の方々も参加した防災総合訓練をしたいという話が市から来た時、３階の教室からグラウンドに逃げても全然意味がないなと思いました。子どもたちが生活をするのは、家、社会、地域の方でしょ。だから自宅から学校に、地域の人たちと一緒になって避難をしてくることが大事で、そのためには地域を知り自分も地域の一員だという気持ちを持たせたかったんです。

丸藤：　地域の全ての町会のかたも参加されてましたね。

内城：　２３グループで行ったのですが、全てに町会や地域の方が入りました。嬉しかったです。子どもたちも地域のことがよく分かったと言い、地域の人たちからは、子どもたちって意外と地域のことを知ってるねと言っていただきました。

丸藤：　地域とのつながりが深くなってきましたね。防災総合訓練はどんな感じでしたか？

内城：　釜石には「訓練は真剣でなければだめだ」という言葉があります。子どもたちにも先生方にも言ったのは、真剣にやろうということです。子どもたちが将来どこに住もうがどういう時代になろうが、災害に遭った時、瞬時に判断をして行動に移す力をつけるための訓練だと理解してもらいたかったのです。

丸藤：　中学生は変わってきましたか？

内城：　変わってきました。一年生が福祉をテーマにした課外学習を行った時、この地域は坂が多く高齢化率の高い地域なので、そういう人たちに手助けしてあげることが必要だと発表していました。感動しました。防災意識を高めるということを柱に、思いやりが広がってきているように感じます。

丸藤：　学んだことが、災害時だけでなく、毎日の生活に活かされていく。

内城：　それだと思うんです。結果的に地域住民の一員であるという意識をしっかり持ち、支援を必要としている人に寄り添えるようになり、地域からも、頑張ってるね、期待してるよと言ってもらえるようになります。地域の人たちが目をかけてくれるということは、素晴らしいことです。

丸藤：　次への思いは？

内城：　防災意識を高めるには１０年かかると言われています。ですから、小学生も含めての活動にしていきたい。それから、「安否札」を地域で広めていくことで防災意識を高めたい。もうひとつは、学校が避難所になるという意識を我々がしっかり持ち、地域の人と運営していく訓練が必要なんじゃないかと思います。学校が閉まっていた時に災害がおこったらどうするのか？先生や行政の人がすぐに来れない場合も多くあります。学校でやらなきゃいけないことは、まだまだたくさんあります。

丸藤：　最後に、中学生にメッセージを。

内城：　自分で自分の身を守る。その時、判断でき行動に移せる力と、そのために、被災地から学ぶ姿勢をしっかりつけてもらいたいですね。

〈聞き手〉 函館市地域交流まちづくりセンター
センター長　　丸藤 競